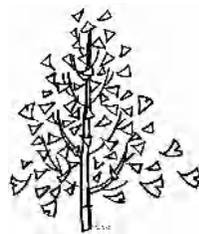


日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

ニュースレター 第22号、2014. 11. 10

★今号から、日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。



「ギリギリの選択—非暴力抵抗—愛敵」

「あなたの敵を愛しなさい。」(マタイによる福音書 5 章 44 節 b)

岡田 富美子

2014年7月20日(日)午前2時30分、辺野古埋め立て用資材がトレーラー40台で搬入されました。3年前、新聞記者が防衛省沖縄防衛局長に尋ねました。「辺野古新基地に関する環境影響評価(アセスメント)の評価書の提出時期はいつですか」その時の返答が「やる(犯す)前にいついつやり(犯し)ますよ、といたしますか」でした。米兵による性暴力を例えたものと思われます。日米政府関係者は、沖縄の県域に入るや、他都道府県では決して使わないような、人権無視の言葉使いや振る舞いをします。まるで、サーモスタットが作動して反射的に出るかのようです。オスプレイ強行配備反対、辺野古埋め立て反対、高江ヘリパット建設反対、10万人県民大会で叫んでも、「いついつ始めますよ」と言わずに、埋め立てに着手しました。どうして沖縄の民意は無視され続けるのでしょうか。県民の8割が反対しているのです。連日、キャンプ・シュワブ前で座り続け、カヌーや船に乗って海に座り続けています。マタイ共同体が「復讐してはいけない」「敵を愛しなさい」の御言葉に生き残りをかけてギリギリの選択をしたと伝えられています。武器、権力、お金、力を持たない沖縄県民は非暴力抵抗の座り込みを選んだのです。1955年来、伊江島で銃剣とブルドーザーで土地を取り上げられて、この御言葉にかけたキリスト者阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)さんの生き様に倣っています。沖縄の眼差しは日本のあり方を問うているのです、「それでいいのか」と。

(おかだ ふみこ/性差別問題特別委員会委員、那覇新都心教会)



「凸凹を平らに」

今井 朋恵

人権とは、人が生まれながらに持っている宝の様です。人間は、社会の中で時には群れ、集団で生きることもあります。個の尊厳は、とても大切です。時に応じ、個々に与えられる役割りは変化したとしても、どんな時にも変わらないことを願うのは「平らな関係性」です。

人間が集まるところで、うれしいこと、苦しいこと、困ったことが起きてくることは、自然なことです。問題は、その時にどう振る舞うかであって、対応によって人を傷つけることにもなり、或いは慰めともなるでしょう。

例えば「力」は直接見ることができないため、そのものを表現することは難しく、「力」によって引き起こされた現象によって、それを把握します。創造力・表現力・想像力・影響力・忍耐力・学力・経済力・腕力…様々あります。多くの製品に取り扱いの説明があるように、それぞれの目的に適った「力」の使い方をすることが大事だと思います。

誰しも、自分のことを客観的に判断することは難しいのです。そういう意味では、人間は平等ではあり得ないのです。自分の限界、大前提を知ったうえで、他者との関わりをもつことが重要でしょう。自分に悪気はない、むしろ愛情をもって行うことであっても、相手と自分は別人格であり、境界線が存在することを知る必要があります。自分にとってのOKが、必ずしも他者にとってもOKとは限らないと心しなければなりません。

教会について考える時にも、普段から感じていることを表現しやすい環境や人間関係が、風通しのよい教会を作ることとなるでしょう。イエス・キリストを主と告白する私たちバプテストの群れは主の御足の跡に従い、細くて困難な道を歩むよう導かれていると思います。誰かを犠牲にすることを前提とした繁栄は長くは続きません。こんな時、イエス様ならばどうされるだろう？と立ち止まって考えるゆとりを持ちたいものです。そして、互いが思いを打ちあけ、同じように喜べる方法を探していきたいと願うのです。

(いまい ともえ／性差別問題特別委員会委員長、今治教会)



「セクシュアル・ハラスメント防止・相談委員会より」

加藤 美代子

「教会で、性的嫌がらせ、性暴力（セクシュアル・ハラスメント）などあるのか」、という声を未だ聞きます。そんなことないと言えればどんなに良いでしょう。けれどもあると言わざるをえないのです。

勇気を出して相談していただくのは、その中の極少数と思います。委員は相談電話を24時間体制で対応しようとしているわけですが、状況によって取れない場合もあります。一所懸命訴えをお聞きしても、本当に話してよかった、分かってくれた、相談してよかったとっていただけたかどうか、いつも聴き手の普段の人権感覚、内面の態度が問われます。一緒に解決方法を探る中で、相談された方の尊厳の回復がなされ、その方が持つ本来の力と自由に気づいていかれることを願っています。

性暴力の被害を受けた方は自分の価値が信じられなくなり、特に相手が教会の牧師であると、全く信頼して自分の実存をかけていた世界観がゆらぎ、もはや信頼できる人はいないのだと、その傷つきは相当に大きくなります。最悪の場合には自己否定感が強くなり、自死に至ることもあります。セクシュアル・ハラスメントは性差別意識に基づく「犯罪」なのです。

相談を伺っていると、教会の中に、あるいは教派を超えて、いかに多くの多様な暴力があるのかと憤りを覚えます。軽口、からかいなど、本人は無意図的でもちょっとした表現の中で、人の尊厳を深く傷つけていることがあります。わかっているであればなおさら悪質です。教会の中でリーダーとして立てられた人は、その地位や相手の信頼感を利用して他の人の人権を脅かすことがよもやあってはなりません。

セクシュアル・ハラスメントを含む暴力がどうしたら無くなっていくのか。一暴力の構造を知り、学んでいくことと同時に、普段からひとりひとりがお互いの人権を尊重したコミュニケーションや意思表示を心がける努力が必要です。それは無意識レベルでのいろいろな差別性を問いなおし、各自が自らを教育し直し続けることでもあります。お互いを自由に解放し合い、その人の本分を活かし合う、互いにのびのびと仕える教会であることが、暴力を減じていく教会であることと同義であると思います。

(かとう みよこ／セクシュアル・ハラスメント防止・相談委員会委員長、四日市教会)

「相談事例から見えてくること」～何に気がつけたらよいのか～

城倉 由布子

セクシュアル・ハラスメント防止・相談委員会が正式に相談を受け付けてから早や9年もの月日が経とうとしています。この間の相談は、平均して年に2件から3件です。その中のひとつの事例を通してセクシュアル・ハラスメントを防ぐ基本的な考え方を述べたいと思います。

共に祈ることは麗しいことなのですが、そこで問題が起きることもあります。「二人きりになろうとする、手を握ろうとする、近い距離で祈ろうとする」。ある人にとっては、とてもうれしいことでもあります。ある人にとってはセクシュアル・ハラスメントだと感じることもあります。このような例を紹介すると、特に男性からは「もうこれからは女性と祈るときには距離を取らなくてはなりませんね。気をつけよう。」と言われます。さて、何に気がつけたらよいのでしょうか。女性を見たら常に腫物に触るように身を引くのでしょうか。加害者にならないために重要なのは、「その人とどういう関係なのかを考える」ということです。関係性の違いに気づくセンスを磨くこと、それが相手を尊重し、ひいては加害を起ささないことにつながります。

私たちの関係性は多くの場合「強者」と「弱者」に分かれます。例として「牧師『先生』と祈る時は、専門家としての「先生」が信徒よりは専門知識を多く持つという点で「強者」となります。その場合、手をぎゅっと握られてなんだか不快な気持ちになったとしてもとても「ちょっとやめてくださいよ！」とはなかなか言えない関係性です。

誰が、「強者」で「弱者」なのかは場面が変わればその関係性は逆転もします。自分がここでは「強者」だと認識しそこに快感を覚えて行動すること、そこに多くの場合のセクシュアル・ハラスメントの要因があります。「弱者」の側が自由に自分の気持ちを発言できるような関係性を築くことこそがセクシュアル・ハラスメントを防ぐ第一歩なのです。

(じょうくら ゆうこ／セクシュアル・ハラスメント防止・相談委員会委員、泉教会)

.....

編集後記：「力」について問われるべきは、その質と使い方です。今号は、特にそのことを覚えつつ、沖縄からの声、そして、セクシュアル・ハラスメントの相談を実際に受けている委員の方たちの声に聞きました。人の力は限界があり罪深くて、神の「善き力にわれ囲まれ♪」ているゆえに、なお希望があるのです。 (三島バプテスト教会 中條譲治)